

伐る 出す 流す

山仕事のおんちゃんたち

わだしら、小さい時（とき）ねえ、あの春休みつとどほらあ、親たちい、「今日ほら、二人でえ、山さ、親父だのおんちゃんたち、行っでっから、おかず背負（しょ）っでけえ」って。二人でほら、姪っこと二人で、雪渡（わだ）って行くのよお。うん、お弁当持って。でまず、雪渡つとぎ、急いでくんだ。こっちも雪渡る、もっど山は山ほど雪渡るからね。ちょうど山さ着いだころ、十時ころ着ぐね。

ほっとお、雪焼けんかってえ、ほら男の人さ、真あっ黒になってんのは、雪に焼けてねえ。ほっと、わだしら、「だれそれおんちゃん、なあしてそんなに真っ黒ぐなったのお」って言うの。「雪に焼けたんだあ」って。「雪、焼けねえべやあ。雪、白いんだお」って言う。「雪、白いもの。焼けるわけねえべやあ」って。「白いのが、太陽がほっちゃあ光っとお、太陽の光でえ、おらの顔、焼けんだあ」なんて。

「体も、ほゆに真っ黒ぐなったのお」って。「手え出して見してえ、手え出して見してえ」なんて、すぐんだ、出さねえと。「ああ、うるせえがきどもだなあ、ほれえー」なんて言（ゆ）って。「あらほんと、顔ばり真っ黒だっちゃなあ」なんて言（ゆ）ってね。

こんど、お昼休みい、みんなお昼休みしでと、ソリあるんだわ、大っきいソリ。ほら木を付けて引っ張るソリだからねえ、こんな幅広いソリ二本。あのモッタつつの附けで、ほれ走るわけっしや。それを持だれないがら、引っばっできてえ、なんとかこう雪をならして、下り坂さ行って、二人で乗るのよ。今度運んでくる時、みんな端（はじ）まで、そのソリをね、持って行かれないうんだわ、現場まで。うん、重い、子どもたち力で上がらないは。でえ、「二人しで行っだお」なんて。帰っできて怒（おご）られて。「おかずなんか、おまえら、持って来っことねえー」なんて怒（おご）らって。でも、面白いんだあ、走るし、うん。（『升沢にくらす』p.247）

眼ギツツとして

毎日ね、おらあ、炭焼いっぽうだったからね。だから、稼（かしえ）がねば、食べらんねから、毎日山さ行って、稼（かしえ）いでも食うだけやと。食べるばりでね。うーん、ほら、旦那は戦争さ連（ちえ）でがったしね。あどうちのおじいさんとおばあさん、いだんだげっども、じいちゃんも心臓悪い、働かないしね。ばあさんは働くんだげっども、年取ってっしね。んだから難儀したの。私一人して、うんと難儀した。

ソリで木い出すとき、もう崖（がけ）ね、ほれ、お舅じんつあんはね、ソリ曳ぐと、こう、チクチク曲げてけたんだげっども、女（おなご）だもの、力ねがすべや。「さあ、こご、足一つ外（はず）しええ、おれ死ぬんだなあ」と思ってね、曲がり角さ来たら、眼（まなぐ）ギツツとして、仕事しで歩いたよお。あの、朝起きとね、体（からだ）痛（い）くて、体（からだ）痛（い）くてね、ほのころの、ご飯炊くの、ハガマでいっそうで炊いたからね、このクドさ火い焚くのが大変だったの。しゃがまらねんだ、体痛くて。力仕事したからね。脛から腰からみな痛（い）くて。ほんでも稼（かしえ）がなぐないから、稼（かしえ）いで。

だから、おれ、「死ぬっけえ難儀しだ」って口（くっ）ちゃ出たんだ。（『升沢にくらす』p.269）

